
悪ノ王子 ~アレンside~

楽音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪ノ王子 〜アレンside〜

【Nコード】

N5835Q

【作者名】

楽音

【あらすじ】

むかしむかしあるところに、悪逆非道の王国が存在していました。イエロ・アントーニア。通称『黄ノ国』

その黄ノ国の頂点に立っていたのは、まだ齡十四という王子様。亡き国王両陛下の過保護なまでの『愛』故の傲慢さ。政治の知識を持ち得てない『無知』故に、全てを大臣達に任せつきり。大臣

達もそれをいいことに、自分達で好き勝手に政治を行なう有り様

これは・・・鮮やかで狂おしく、悲しげな結末を迎えた王子様の物語――

語り継がれる歴史

むかしむかしあるところに、悪逆非道の王国が存在していました。
イエロ・アントーニア。通称『黄ノ国』

その黄ノ国の頂点に立っていたのは、まだ齡十四という王子様。
亡き国王両陛下の過保護なまでの『愛』故の傲慢さ。政治の知識
を持ち得てない『無知』故に、全てを大臣達に任せつきり。大臣
達もそれをいいことに、自分達で好き勝手に政治を行なう有り様

これは・・・鮮やかで狂おしく、悲しげな結末を迎えた王子様の物
語――

初めまして。

楽音と申します。 以後お見知り置きをm(_____)m

この小説は、原作『悪ノ娘』の二次創作、『悪ノ王子』の動画を、
120%個人解釈した小説です。「『悪ノ娘』って何？」と言う方
は、まずは一度そちらをお聞きください

前振りが長くなってしまっているので、これにて失礼させていただきます
m ((m

登場人物（前書き）

キャラ紹介です

個人妄想120%なので注意（汗）

登場人物

名前 アレン・アントーニア

年齢 14

性別 男

職業 王子（次期国王）

役担当 鏡音レン

栄華を極めた『黄ノ国』の、第十八代王子。

何不自由なく過保護な愛を受けたせいで、傲慢でワガママに育ってしまった。

亡き国王両陛下の後を引き継ぎ現代国王になったが、無知故に全てを大臣に任せ、自分は贅沢きわまりない生活を送る

名前 リリアンヌ

年齢 14

性別 女

職業 召使

役担当 鏡音リン

アレンに使える側近、及び直属の召使。

庶民層の出身らしく、偶然にも『容姿が、髪型以外は王子とよく似ている』という理由で召使として城に招かれることになった

名前 メイコ「イシュヴァンヌ」
年齢 20
性別 女
職業 国王護衛騎士団 団長↓反乱連合軍 リーダー
役担当 MEIKO

代々国王直属の名門護衛騎士である、『イシュヴァンヌ家』の女性。
男性顔負けの剣の腕を持つ。
アレンの下で仕えていたが、父や恋人を殺され、それでも悪逆非道の政治を繰り返す王子に我慢できず辞職。その後、それを止めるべく反乱を起こすことを決意する

名前 ミクリア・ガーディン
年齢 15
性別 女
職業 王女「反乱連合軍」副リーダー
役担当 初音ミク

グリーン・ガーディン。通称『緑ノ国』の王女様。
青ノ国の国王であるカイトに一目惚れし、求婚を申し立てる。だが、黄ノ国の軍によってそのカイトを殺されてしまう。
そして彼女もまた、仇を討つために反乱軍の一員として戦うことを決める

名前 カイト・アイシクル
年齢 18
性別 男
職業 国王
役担当 KAITO

ブルー・アイシクル。通称『青ノ国』の現代国王。
彼もまたミクリアのことを愛し、彼女の求婚を受け入れる。
だがそれにより、嫉妬に狂ったアレンの命令で襲撃してきた黄ノ国
の軍によって、若くして命を落とすことになった

名前 ガクウエル・ナスタシア
年齢 26
性別 男
職業 大臣
役担当 神威がくぼ

ニチモト。また『紫ノ国』の出身である男性。
直接悪逆な政治を行っている大臣達の中で、唯一改正しようと奮起
している。
だが……

名前 ハクネシロナ

年齢 16

性別 女

職業 修道女

役担当 弱音ハク

海辺の小さな教会に勤める、修道女の少女。

緑ノ国の出身だが、その白髪のせいで周りから迫害を受けるとい
過去を持つ。だがミクリアと出会い、仲良くなった彼女の計らい
の元、修道女として働くことになった

登場人物（後書き）

サブキャラの紹介は、都合により今は省きます（^^;）

時期が来たら書き足そうと思います

第一章 悪逆非道な政治 一話 王子『アレン・アントーニア』（前書き）

「この世にある物は全て僕の物」

「壊れたら、弱き者から奪い取ればいい」

「無くなったら、弱き者から奪い取ればいい」

「足りなくなったら、弱き者から奪い取ればいい」

「そして、僕に逆らう者は粛正すればいい」

それが僕のやり方。

それが僕の考えだ

第一章 悪逆非道な政治 一話 王子『アレン・アントーニア』

「あーはっはっはっはっ！ さあ、跪くがいい！」

城のバルコニーから、僕は高らかにそう言った。

下には愚民共が、僕を見ている。ある者は怯え、恐怖した目で。ある者は怒り、憎しみが籠もった目で。でも、誰一人として僕に反論する者は居なかった

奴らは理解していた。

逆らえば、目の前の男のようにされてしまうと

愚民共の目の前には赤い血しぶきを身に纏い、引き上げられるギロチンの刃が。つい今し方生きていた、僕に逆らった男が寝ころんでいる。

実に滑稽だ

アレン「思い出したか？ 愚民共。『アレン・アントーニア』に逆らえばどうなるかを・・・」

僕——『アレン・アントーニア』は愚民共を嘲笑った

威圧され、完全に折れてしまった愚民共は、すごすご僕の前から離れていった

僕、アレン・アントーニア。

十歳の時に国王両陛下（父さんと母さん）を亡くして、この座に着いた。

・・・と言っても、まだ正式な国王じゃないけどね。『王子』かな。

そして政治に無知な僕の代わりに、有能な大臣達が上手くやってくれている。そのおかげで、僕は何も悩まされなかった

「お疲れ様です、アレン王子」
アレン「んっ？　・・・ああ、『シエルツ』か」

自分の部屋に戻ろうとした時、黒い清楚な服を着て、白い髭を生やした中年の男が話しかけてきた。『シエルダン・ツヴァイアート』。名前が覚えづらいから、僕はこいつを『シエルツ』と呼んでいる。僕がもつとも信頼できる大臣だ。いつも頼もしい助言をしてくれる

アレン「税の方はどうだ？　ちゃんと集めてるだろうな？」
シエルツ「勿論です。少々荒いやり方しておりますが、今月分も順調に徴収しております」

アレシ「そうか。どんな手を使ってもいいから、愚民共にきつちり税を納めさせる。逆らう奴は肅正すればいいっ！」

僕はシェルツにそう言いつけると、自分の部屋に真っ直ぐに向かった

二話 楽しみな時間

自分の部屋に向かう途中、何人かの召使と擦れ違った。

擦れ違う度に、みんな頭を下げてお辞儀をする。僕は見向きもせず自分の部屋へと向かう。

僕は王子だ。一々頭を下げる必要なんかない。それに今は、それどころじゃないんだ

僕は、自分の部屋の扉を開けた

壁には、宝石がふんだんに埋め込まれた額縁の自画像が掛けられている。高級感を漂わせる白の棚の上には、ズラリと調度品が並べられている。僕がいつも寝ているベットは、高級素材を使用した本体の上に、しわ一つもない純白のシーツが被せられていた。

ここにある物は、全部僕の物。周に一回、召使達に丁寧に磨くように命令している。部屋の掃除もベットのシーツの取り替えも、全部。王子（僕）の部屋だから当然のことだ

ボーン

ボーン

ボーン

オーダーメイドで作らせた白い柱時計が、午後三時を知らせてくれた
アレン「ああ、おやつ時間だな」

僕は口癖のようにそう言った。
ダイヤ型の黄色いテーブルクロスが被さった、丸いテーブルの近くの、丸い椅子に腰をかける

アレン「まだかな、まだかな・・・」

僕はその時を、今か今かと待ち続ける。この時が、時間が一番長く感じる。

ああ、まだかな、まだかな・・・

コンコンッ
コンコンコンッ

来たっ！

アレン「入って！」

ガチャッと扉を開けられると、僕と同年くらいのメイド姿をした少女が、おやつと飲み物を載せた貨車を押して入ってきた。彼女は貨車を完全に部屋の中に入れた後、部屋の外で誰も居ないことを確認して扉を閉めた

アレン「待ってたよ、リン！」

同じ背・同じ髪色・同じ顔をした彼女——『リン』と、僕は呼んだ。

リンはにつこり僕を見ながら、貨車の上にあつたおやつと飲み物を運んでくる

リリアンヌ「きょうのおやつは『ロールケーキ』よ」

僕の顔から、自然と笑みが表れる。

大好きなおやつと、大好きなリンが傍に居る

毎日のこの時間が、僕がリンと楽しく居られる唯一の時間。唯一の楽しみだった

アレン「いただきまーすっ！」

右から二番目のロールケーキの一切れを削り取り、口の中に運ぶ。
甘いクリームとスポンジが、僕の舌の上でダンスする

アレン「うん、美味しい」

僕はチラリとリンを見る。

リンは僕がおいしそうに食べる姿を見て、嬉しそうに笑っている。
そんなリンの笑顔が、僕は大好きだ

アレン「ふう〜・・・」

リリアンヌ「あれっ？ お腹いっぱい？」

アレン「うん。 だから、残りはリンにあげる」

皿の上には、まだ二切れも残っている。

リンは手を振り、首を横に振った

リリアンヌ「私はいいよ。 召使が、王子のおやつを——」

アレク「今はそんな時じゃないだろ？ それに、今ここには僕と君しか居ないんだ。 口を滑らさなければ大丈夫さ」

リリアンヌ「・・・それじゃ、いただくわ」

僕の言葉に納得した様子で、リンは皿を手にとってロールケーキを手に口に運んだ

リリアンヌ「ん、我ながら美味しい」

リンも、自分が作ったロールケーキに満足していた

こんな時間が、いつまでも続けばいいのに。

僕はいつもそう思っていた。

だけど時間は、僕の命令には従わない。 自らの使命を全うし、時を刻み続ける

リリアンヌ「もうこんな時間ね」

時計の針が、三時半を刺す。

リンは食べ終わった皿とコップを貨車の上に戻し、部屋の扉を開けた

アレン「じゃあね、リン」

僕はリンの姿を、寂しげに見た。

リンも顔で返すと、「失礼しました」とだけ言い、貨車を運び出して扉を閉めた。そして、足音と貨車の運ばれる音が遠くなっていた

僕の顔から、自然と笑みが消えていった

アレン「あーあ・・・」

今日も終わっちゃったなあ・・・。　　楽しみな時間・・・

耳に、時を刻む音が入ってくる。　僕は横目で柱時計を睨み、悪態を吐いた

時間っていじわるだな。　仕事や会議をしている時は長く経つくせに、楽しい事をしている時だけは短く経つんだもんな

それでも柱時計は、そんな僕の気持ちに気にかけるはずもなく、いつもみたくに時を刻み続けた

三話 嫌いな男

——ですので、減税の方を検討してください。 アレン王子」

大臣の一人が、僕にそう言ってきた。 この大臣はシエルツや他の大臣とは違って、若くて、紫の長髪をしている

アレン「『ガク』・・・、俺に『贅沢するな』、とでも言いたいのか？」

僕は嫌らしそうな目で、ガク——『ガクウエル・ナスタシア』を睨みつけた。

正直言つて、僕はこいつが嫌いだ。 会議での毎回の提案で、唯一大臣達の中で反論してくる。 増税したら「下げる」だの、「力で従わせるのではなく、助け合って手を取り合うべきです」だの・・・。

おかげで、提案の決定まで時間がかかる。 考え方が全く合わない。 だから僕は、こいつが嫌いだ

話の分かるシエルツとシエルツ以外的大臣も、皆ガクを軽視した。でもガクは、そんな視線を気にせず話を続けた

ガクウエル「あなたは、国民が汗水流して働いて納めたお金を、無駄に使っています。 税金というのは、国全体を豊かにする為に存在するのです」

これだ。 僕が何かする度に、ガクは難癖をつけてくる。 説教されてるみたいで、イライラする！

アレン「国の頂点に立つ王子（俺）が、どんな使い方したっていい
だろ！ それに、愚民（あいつ等）ば道具だ！ 王あつての民だ！」
ガク「それは違うつ！ 王も国民も、手を取り合って生きていくべ
きだ！」

シエルツ「口を慎め！ ガクウエル・ナスタシア！」

シエルツが、ガクを黙らせてくれた

アレン「・・・もういい。 ガク、席を外せ」

ガク「！ まだ私は――」

アレン「命令だ！ 出ていけ！」

ガク「――・・・失礼いたしました」

ガクは愕然として席を外した。

そして、会議室の扉を開けて、出て行った

ガク「

」

出て行く際、何か言ったような気がした。 でも僕は、耳を傾けな
かった。 聞きたくなかった

「アレン、何か困ったことがあれば『ガクウエル』に相談するんだ
ぞ」

父さんの嘘つき。

ガクの奴はちつとも役に立たないよ。僕に反抗ばっかしてくる。
あいつなんか・・・大っ嫌いだ！

それから間もなくなかった。

ガクが辞職したのを聞かされたのは

アレン「ガクが・・・辞職？」

シエルツ「はい」

シエルツが、手に持っていた便箋びんせんを僕に手渡してくれた。僕はその内容を目で追い始める

『アレン・アントーニア王子へ』

あなたのやり方に、私はもう着いていけません。

よって私、ガクウェル・ナスタシアは、正式に辞職することを申し出ます

ガクウェル・ナスタシア』

アレン「まさかあいつがな・・・」

シエルツ「むしろ喜ぶべきでしょう。身近で、あなた様に口出しする奴が居なくなったのですから」

・・・確かにそうだ。

あいつは、僕に口出しばかりしてきた。居なくなって万々歳だ！

アレン「そうだな。むしろ、自分から居なくなってくれてせいぜいする」

僕の口元が、次第に歪む。ガクを嘲笑う、笑みに

アレン「これからも頼んだぞ、シエルツ」

シエルツ「はい」

シエルツもまた、僕と同じように口元を歪めさせて、笑った

四話 王子と愚民共

パカラッ パカラッ パカラッ

パカラッ パカラッ パカラッ

アレン「イノベータ！ どうっ！ どうっ！」

僕が手綱を引くと同時に、愛馬『イノベータ』が止まった

僕は今、気晴らしにイノベータに乗って、城内にある大庭園を走り回っていた。

白い体に綺麗な黄色の髪を靡^{なび}かせるイノベータ（こいつ）は、イエロ・アントーニアの中で由緒正しき血統を持った馬だ。もちろん、乗っていいのは『アントーニア家の者』だけだ。僕は王子としての仕事があるから、世話は全部召使達に任している

アレン「イノベータ、何か足が速くなったか？」

・リリアンヌ「久々にレンと一緒に走ったんですもの。嬉しくて仕方ないんだわ」

アレン「そうかそうか」

リンの言葉に納得した僕は、イノベータの首を優しく撫でた。イノベータは「ブルル・・・」と小さく唸る

・・・そうだっ！

アレン「ねえ。 リンも一緒に乗ろうよ」

リリアン又「えっ!？」

アレン「大丈夫だって。 恐くないよ。 . . . それに、君だって
こいつに乗る『資格』があるんだからさ」

リリアン又「. . . 本当に？」

最初は戸惑ったリンだけど、首を縦に動かしてくれた。
そして僕は、リンを乗せるためにイノベータから降りて――

「王子！ アレン王子！」

鎧を身に纏った一人の兵士が、僕とリンの下に慌ただしく駆け寄ってきた。僕は怪訝そうな顔でその兵士を睨む。

せつかくのリンとの時間を邪魔されて、すごく嫌だった

何だよ. . . こんな時に！

アレン「一体どうしたんだ？」

「城に若者が一人、不法侵入してきました。 『王子に会わせろ！』

と喚いています」

アレン「で、今そいつは？」

「拘束しました。 なので今すぐ、謁見の間に来てください」

僕はリンに顔を合わせた。 リンからは残念そうな様子は見えず、
黙ったまま、イノベータの手綱を掴んだ

アレン「——リリアンヌ、イノベータを馬小屋へ戻せ」
リリアンヌ「かしこまりました」

広々とした空間。 否、謁見の間。

一番奥の高い所にある玉座に、僕、アレン・アントーニア王子が。
そして、数段の階段を挟んだ向かい側、イエローカーペットの上に、兵士によって拘束された例の愚民が

「お前、国民（俺達）のことを考えたことがあるか・・・？」
アレン「・・・」

愚民の男性は、いきり立って僕に言い続ける

「薬を買うお金が無いせいで、おふくろは病死！ 友人一家は税を
払えないからって、皆殺しにされた！ お前が決めた増税や徴兵、
進めた政治のせいで、俺達は餓死寸前だっ！」
アレン「・・・はあ」

僕は愚民の愚痴を聞かされるために呼ばれたのか？
・・・腹立たしい！

アレン「言いたいことはそれだけか？」
「税を下げるっ！ 徴兵をなくせっ！」
アレン「兵士共、ギロチンを用意しろ。 俺の貴重な時間を潰した、
こいつへの罰だ」

兵士は「はっ！」とだけ言つと、鎖を引つ張つて愚民の男性を連れて行つた。

愚民の男性は僕から離れていくにつれ、要求や愚痴、ついには僕に對しての罵声を叫び続けた

そして、その日の夕方。

その愚民の男性は、断頭台の上で息絶えた

「どけっ！」

謁見の間の大扉が突然、大きな音を立てて開いた。

そこから、赤い短髪で燃える炎と同じ赤い鎧を身に纏った一人の女性が、ズカズカと入ってきた

アレン「どうしたんだ？ 『メイコ』、そんな恐い顔して」

赤い鎧の女性——『メイコ』イシュヴァンヌは、怒りを露わに僕を睨みつけた。

そして、怒涛の声で叫んだ

メイコ「アレン王子！ あの男を・・・恋人をつ！ 何故殺したのですか！？」

あの男？

……ああ、さっき処刑したあの愚民か

アレン「王子の数十分という、貴重な時間を潰してくれたからな」

メイコ「たった……それだけの理由で……？」

メイコの目が、どんどん見開いていく。膝を床に着けて、落胆する。

僕は今日の謁見と同じく、ため息を吐いた

アレン「にしても、君の周りにはろくな人間が居ないんだね。君の恋人も、君の父さんも——」

メイコ「！？ ということですか！？」

メイコは俯いていた顔を上げ、僕の顔を凝視した

あ、そっか。

彼女には何も言っていなかったっけ……

アレン「だってあいつ、国王護衛騎士の分際で、俺の政治に口出しするからさ……」

僕は嘲笑い、メイコ（護衛騎士団 団長）を見下すようにこう言った

アレン「護衛は護衛らしく、黙って俺の盾になることだけを考えればいいんだよ」

メイコ「……………きつ、貴様ああああっ!!」

メイコは腰に掛けていた剣を引き抜いて、僕に斬り掛かろうとした。それを周りに居た兵士が、阻止する。さすがの国王護衛騎士団の団長でも、大の男性陣四人では抵抗することも出来なかった

アレク「メイコ!! シュヴァンヌ、君に『帰宅軟禁』を下す。……連行しろ」

兵士がメイコを連れて歩き出す。
連れ出される間際、メイコは僕にこう言った

メイコ「数々の人を殺してきた断頭台！ 今度は貴様が、その上に立つと思えっ！」

バタンツ

静まり返る謁見の間。

大扉の閉まる音だけが鳴り響いた

アレク「……………」

僕が？

アレン「…………ふっ」

次は僕が、ギロチンに処せられるだど？

アレン「ふっふっふっふっ……あーはっはっはっはっはっ！ はーはっはっはっはっはっ！」

そんなこと、天地がひっくり返ってもありはしない！

そんなことになる前に、そうする奴等を片っ端から殺せばいいっ！

僕に逆らう奴は、みんな死ねばいいんだっ！！

アレン・アントーニアの高笑う声が、謁見の間に響き渡った――

第一章 完

四話 王子と愚民共（後書き）

第一章、無事書き終えることが出来ました（；＾＾）フウ

この小説を読んでいる皆様に、本家の悪ノシリーズと、二次創作である悪ノ王子を理解してもらえたら嬉しいと思います！

また、誤字・脱字・感想などがあればお知らせくださいm（――）
m

それでは、次回から第二章の始まりです！
でわわ ノシ

第二章 恋と嫉妬と滅びと 一話 カイト国王の誕生パーティー（前書き）

僕には、愛しくてやまない一人の『少女』が居た。

僕はその少女を妃きさきとして迎え、永遠の愛を育むんだ

・・・でも、あいつが悪いんだ

僕から少女（彼女）を奪ったから・・・

第二章 恋と嫉妬と滅びと 一話 カイト国王の誕生パーティー

見渡す限りの、大海原。

青い空と青い大地の狭間で、一席の豪華客船が渡っていた

アレン「うわぁー・・・」

僕はその壮大な眺めに、心奪われていた

この日、僕達は『青ノ国』の現代国王の誕生日パーティーに招かれていて、そこに向かっているところだった

アレン「いつ見ても綺麗だね！ リン」

リリアンヌ「そうよね」

少し後ろに居たリンが、僕の隣に来て海を眺めた。

その時だ。 リンが、クスツと小さく微笑んだ

リリアンヌ「・・・本当、久しぶりね」

アレン「えっ？」

リリアンヌ「こうやって二人、横に並んで海を眺めるのって・・・」

アレン「あっ・・・」

そう言えば・・・そうだ。

僕が王子として、リンが召使として分かれたあの日を境に、一度たりとも無かったつけ……。お互い、立場が変わってゆっくりする時間がなかったからなあ……

ボー……

ボー……

船の汽笛が響き渡る。

もうすぐ港に着く合図だ

リリアンヌ「そろそろ降りる準備をしないかね」

リンは「一国の王子が、遅れちゃだめよ」と僕に一言だけ言って、忙しなくその場を去っていった。

一人残された僕は、延々と続く大海原を名残惜しく見つめた後、ゆっくりとリンの後を追った

「イエロ・アントーニア十八代次期国王、アレン・アントーニア王子。二日間の船旅、お疲れ様です」

城の入り口に、青い立派な服を着て丸く太った男が、僕たちを出迎えてくれた。

この国の大臣だ

「馬車の乗り心地、いかがでしたか？」

アレン「まあまあかな」

出迎えようの馬車から先に僕が、次に荷物が入った鞆を持ったりリンが、順番に降りた。

城内に続く道には、両脇に一列に並んだ噴水が、一斉に噴き出した。予めセツトしていたのだろう

「ささ、パーティー会場の方へ。 国王もお待ちしております」

水色の床の上に並べられたテーブル。 そのテーブルの上に並べられた色とりどりの料理を、来客者は摘みながら、談笑に花を咲かせていた

アレン「『カイト・アイシクル』現代国王。 十八歳の誕生日、おめでとう」

カイト「ありがとう、アレン王子」

僕は、目の前の青い髪をした好青年——『カイト・アイシクル』に祝福の言葉を交わす

こいつはこの青ノ国、正式名『ブルー・アイシクル』の現代国王だ。でも、いつもヘラヘラしてたりあの年でまだおやつを食べていたり・・・正直言って、だらしない

そしてそれ以前に、僕はこいつに会いに来たんじゃない。
愛しの『あの人』のために会いに来たんだ

二話 愛しの人

アレン「どこだろ？」

一通りカイトとの挨拶を終え、僕は彼女を探し回る。
背を伸ばして辺りをキョロキョロ、忙しく首と目を動かす

彼女のことだ。 きっとパーティーにお呼ばれてるに違いない

アレン「！ 居たっ！」

そしてその考えは、的中した

来客達と挨拶を交わす、一人の少女。

長く綺麗な緑髪でツインテール。

綺麗な肌色、柔肌。

そして、淡い緑のドレスがよく似合う

僕は、彼女の名を呼んだ

アレン「『ミクリア』！」

僕の声に反応して、愛しの彼女——『ミクリア・ガーディン』が
振り向いてくれた。 結ばれた髪が、彼女の顔を一瞬だけ隠した。
そして、その髪が退いた時、優しい笑顔が表れた

ミクリア「アレン君」

彼女もまた、僕の名前を呼んでくれた。
そしてゆつくりと、僕の所にやって来た

アレン「ミクリア、久しぶりだねっ！」

ミクリア「本当ね。私の誕生日以来だったから……一年ぶりかな？」

僕は彼女との会話を楽しんだ。他の奴等なんか知らない。ただ、

僕は彼女と、一緒に楽しむ時間がほしかったんだ

僕と彼女^{ミクリア}が出会ったのは、今から四年前……僕が初めてみんなの前でお披露目された後、来客者一人一人が僕に挨拶していた時だった

ミクリア「アレン王子、初めまして。『緑ノ国』、『グリーン・ガーディン』から参りました、ミクリア・ガーディン王女です」

これが僕と、彼女との出会いだった。

大自然の色をそのまま取り出したかのような、緑の無垢な瞳。天使のような笑顔。華奢で可愛い声。全てを心から愛する優しい心――

僕は、彼女の全てに惚れた

それからと言うものの、僕は彼女に手紙を出した。週に一回、欠かさず。彼女の方もまた、必ず返事を出してくれた。嬉しかった。好きな人からの手紙・・・。
リンと再会するまでは、この手紙が唯一の支えになった

ミクリア「――・・・っ！ もうこんな時間！」

・楽しく会話をしていた僕と彼女。
だが彼女が突然、会話を打ち切ってしまった

アレン「時間・・・って？」

ミクリア「とても大事な用があるの。ごめんね、アレン君」

彼女は僕にそう告げ、一人、人混みの中へと消えていった

ああ・・・彼女ともっと、一緒に居たかったなあ・・・

三話 崩れ行く理想 黄の王子の狂乱

それから僕はしばらく、その場にあつた料理を食べたり周りの来客者達と話したりしていた。

でも、ぜんぜん楽しくなかった。元々僕は、こういうことをしに来たんじゃない

・・・それにしても

ミクリア「とても大事な用があるの」

『大事な用』って何なんだ？

それに、重要性を高めるために『とても』って付けてたし・・・

僕があれこれ考えていた、その時だった――

フッ

アレン「!？」

パーティー会場を照らしていたシャンデリアの光が、突然消えてし

まった。

周りの来客者達も僕と同じく、突然のことに少し動揺していた

ふと上から、光が姿を現した。舞台の方だった。その光の下には、カイトが立っていた

カイト「誕生日パーティーに来てくれたみんな、驚かしてすまない」

そこに居たカイトは、少し違った。いつもヘラヘラしていた顔は、引き締まり、真面目になっていた

改まった態度で僕達を見つめるカイトは、こう言ってきた

カイト「今から、『重大発表』があるんだ」

重大発表？

僕は首を傾げた

これ、誕生日パーティーなんだろう？

そんなの、一言も聞いてないぞ

そうこう考えているうちに、舞台の上にもう一つ光が現れた。そして、僕の思考は停止した

アレン「ミクリア・・・？」

もう一つの光の下には、愛しの彼女が立っていた。
彼女はカイトの下に歩み寄り、寄り添った。互いに頬笑ましく笑っている

そしてカイトは、僕達にこう言った。
それが後に、全てを終わりに向ける言葉になった

カイト「私、カイト・アイシクルは、ミクリア・ガーディンと結婚する！」

——えっ？

ミクリアが・・・カイトと結婚？

「な、何だって!?!」

「縁談の話が持ち上がっていたが、まさかのまさかだったとは・・・」

「カイト国王、おめでとーございます!」
「おめでとー!」

来客者達の拍手喝采

アレン「そんな・・・」

祝福に包まれる二人

アレン「そんな・・・」

僕には、愛しくてやまない一人の『少女』が居た。
僕はその少女を妃きさきとして迎え、永遠の愛を――

愛を――

ミクリア・・・――

ドサッ

アレン『ミクリア！ ミクリアア！』

僕は右腕を、彼女に精一杯伸ばす。でも、全然届かなかった。
それを見て、カイトが嘲笑った

カイト『悪いね、アレン王子。 ミクリアは貰っていくよ』

ミクリア『ごめんね、アレン君・・・』

二人は互いに寄り添って、僕の前から離れていく

アレン『待てっ！ 待ってよっ！』

追いかけたくて、走った。でも、全然追いつかない。二人はどんどん離れていく

嫌だ・・・嫌だ嫌だ嫌だっ！！

アレン『嫌だああああああ——』

——あああああ！！——

リリアン又「！？」

目の前に広がるのは、見覚えのある光景。
白い壁、黄色の絨毯、ふかふかのベット、絢爛豪華な調度品・・・

ここ、僕の部屋？

リリアン又「レン！ よかったあ・・・」

アレン「・・・リン？」

傍に居たリンが、目覚めた僕を見て安堵する。
その瞳から、涙がこぼれ落ちた

アレン「リン、僕・・・何で自分の部屋に・・・？」
リリアンヌ「あなたはパーティー会場で倒れたのよ。パーティーはもちろん中止。だから、急いで黄ノ国こうちに戻ってきたの」

パーティー・・・？

カイト「私、カイト・アイシクルは、ミクリア・ガーディン王女と結婚する！」

・・・！

アレン「そう・・・だった・・・」

カイトが、ミクリアを・・・

アレン「くそっ！」

リリアンヌ「きゃっ！」

僕はリンを突き飛ばし、ベットから飛び起きた。

そして、目の前に飾られていた調度品を掴み、勢い良く投げつけた

ガシャン！

カイトが・・・あいつが・・・

アレン「くそっ！　くそおっ！」

バリッ！

ガシャン！

ビリッ！

僕からミクリアを奪ったんだ！

リリアンヌ「止めてレン！」

アレン「——はっ！」

リンの一言で、僕は我に返った。

気がつけば、調度品は見るも無惨に変わり果て、カーテンは破れ、花瓶の破片と水が下に散乱していた

何でだよお・・・

アレン「くそおおおおっ！」

何でだよお・・・ミクリア・・・

——王子、アレン王子」

アレン「……………」

あれから三日。

僕はまともに仕事が出来ないでいた。

塞ぎ込む僕の傍で、シエルツが話しかけてくる。政治関係のことだろう

シエルツ「アレン王——」

アレン「うるさいっ！ 政治は全部お前に任せるって言っただろ！」

頼むから消えてくれ。

今は誰とも話したくないんだ……

シエルツ「——……まったく。王子とあろうお方が、女一人

で落ち込まれるなんて……」

アレン「っ！？ 黙れっ！ お前に何が分かるっ！？」

僕は歯をきしり立て、馬鹿にしたシエルツを睨みつける。

シエルツは少し驚いたものの、別段慌てたりはしなかった。寧ろ、馬鹿にしているようにニヤツいている

アレン「その顔は何だ！？ お前も、断頭台に送ってやろうか！？」

シエルツ「……何故落ち込む必要があるのです？」

アレン「何？」

シエルツの不適な笑み。意味不可な発言。

言っていることが分からなかった

シエルツ「『いつも通りにすればいいじゃないですか』」

アレン「『いつも通りに』……だと？」

シエルツ「はい」

いつも通りに・・・

いつも・・・通りに・・・

「この世にある物は、全部僕の物」

「壊れたら、弱き者から奪い取ればいい」

「無くなったら、弱き者から奪い取ればいい」

「足りなくなったら、弱き者から奪い取ればいい」

アレン「・・・ああ、そうだったな」

何で気づかなかったんだろう。

いつもしていたことなのに

アレン「シエルツ、お前は本当に使える奴だ」

シエルツ「ありがたきお言葉」

奪えば・・・奪い返せばいいんだ！

アレン「シエルツ、命令だ——

青ノ国を滅ぼすがいい」

シエルツ「かしこまりました」

シエルツは僕にお辞儀をした後、ゆっくりと僕の部屋から出て行った。

アレ、……あはは、」

僕の高笑う声が、部屋に響き渡る

アレン「あーはっはっはっはっ！ あーはっはっはっはっはっはっはっ

！」

カイト！ 覚悟しろよっ！

僕からミクリアを奪ったことを後悔するがいい！！

四話 青ノ国の終わり

う．．．ん．．．

アレン「——．．．．．」

重い瞼を開け、僕は起きあがる。意識はまだ半分だが、視線をしたらにやれば、パジャマではなく制服のままだった。いつの間にか眠ってしまったんだろう。しかも泣きながらだったから、目がしょぼしょぼする

アレン「．．．．．」

体が．．．重い．．．

アレン「．．．．．えつと、」

昨日のことが、思い出せない。
何か、何か大変なことを言ってしまったような——

コンコンッ

コンコンコンッ

アレン「！」

このドアの叩き方．．．リンだ

アレン「リン．．．？」

リリアンヌ「・・・アレン王子、」

扉越しからのリンの声は、震えていた。 何かに怯え、必死に耐えようとする感じだった

アレン「どうしたのリン？」

リリアンヌ「カイト・アイシクルを、殺してきました」

頭の中が、一瞬真っ白になった

アレン「・・・！」

思い出した、昨日の記憶

アレン「あっ・・・」

そうだった・・・

アレン「青ノ国を滅ぼすがいい」

怒りと嫉妬に身を任せ、青ノ国を滅ぼすようシエルツに命令した

そして、

アレン「リン、」

僕は・・・リンにも・・・

アレン「カイト・アイシクルを殺しに行ってくれ」

酷いことを言ってしまったんだ――

アレン「・・・」

僕は、プライベート用の机に付いている引き出しの右を開けた。

そこには、何十枚との便箋が折り重なって入っている。一番上にあった便箋を取り上げ、静かに眺めた。

『十二月五日』。カイトの誕生日の前日。つまり、この手紙がミクリアからの最後の手紙

青ノ国が滅んで五日。 彼女からの手紙が来ていない。 僕の方が
ら一度出したきりだ

仕方ない。

僕が彼女の愛しの人、カイトを殺してしまったから・・・

アレン「・・・・・・・・」

恨んでるんだろぅな・・・きつと・・・

僕は手紙をソツと元の場所に戻し、引き出しを閉め、そのまま頭を
抱え込んだ

彼女の悲しむ姿が脳裏に浮かび上がる。

・・・僕はなんてことをしてしまったのだろう

ボーン

ボーン

ボーン

アレン「ああ・・・おやつの時間だな」

口が勝手に動いた。 もう癖になってしまったこの言葉。 今は嬉
しくないのに・・・

コンコンッ

コンコンコンッ

アレン「リン……」

リンが、おやつを乗せた貨車を押して入ってきた

リリアンヌ「今日のおやつは『ブリオツシュ』だよ、レ——」
アレン「悪いけど……リン、今は食べたくないんだ」
リリアンヌ「——……」

僕はチラリとリンを見る。

いつもと変わらない態度。 いつもと変わらない振る舞い。 いつもと変わらない顔

リン、君は悲しくないの？
君もカイトのことを……。 そして僕が——

リリアンヌ「私は気にしてなんかいないよ」

アレン「……えっ？」

僕のことを察して言った、リンの言葉。その予想外の内容に僕は驚愕し、リンの顔を見た。
リンは笑顔だった

アレン「嘘だっ！　だって——」

リリアンヌ「確かに私も、カイト国王のことが好きだったよ。でも、それは『本当の』好きじゃなかった」

違う・・・リンは僕に心配かけたくないから、嘘を吐いている

リリアンヌ「それにね、」

リンがにつこりと笑って、僕を見る。
そして、こう言った

リリアンヌ「私には、レンが居るから。だから、寂しくないよ」

アレン「リン・・・」

リリアンヌ「ほら、早く食べて。ブリオツシュが冷めちゃうよ」
アレン「・・・うん」

僕は右手でフォークを掴んで、ブリオツシュを口に運んだ。甘い味が、落ち込む僕を優しく包み込んでくれる

アレン「うん・・・美味しいよ、リン」

僕はリンの方を向く。

リンはまた、にっこりと笑った

そうだ・・・僕には、リンが居る。だから、寂しくなんかない。
もう、ミクリア（彼女）のことは諦めよう

この時、僕は知らなかった。

これから起こる出来事に。 リンと一緒に居られるのも僅かだとい
うことに

そして、全てを失うことに――

第二章 完

四話 青ノ国の終わり（後書き）

ううん・・・四話の更新のしなさのせいで、かなり遅れた（；＾＾）
ごめんなさいm（――）m

ついでに言うと、私、ブリオッシュというお菓子が分かりませんw

次でついに、波乱の革命に突入します？

第三章 黄ノ国、終焉の大革命 一話 破滅への道（前書き）

僕の身の回りを世話する召使達。

その中で、僕と同じ顔をした少女、『リリアンヌ』

僕は知っている。

リンの秘密を

僕だけが知っている。

リンの秘密を・・・

.

第三章 黄ノ国、終焉の大革命 一話 破滅への道

パーンッ パーンッ
パーンッ

アレン「……………んっ？」

妙な耳障りに、僕は眠りから目を覚ました。
意識を覚醒させながら、静かに耳を立てる。
・何か弾いた音が聞こえてくる
遠くから、僅かだが・

アレン「一体何な——」

ドーンッ！！

アレン「うわっ!？」

突然響いた爆発音。 驚きの声をあげながら、僕はベットから転げ
落ちた

アレン「なっ……………何なんだよ一体!？」

僕は立ち上がり、急いで自分の部屋の扉に向かった。パジャマ姿だけど、そんなのはどうでもよかった。一刻も早く、状況を確認したかった。

扉を開け、部屋から飛び出した。

辺りを見渡し、そして、ある事に気がついた

・・・誰も居ない!?

アレン「誰かつ！ 誰か居ないか!？」

僕は無我夢中で、召使達を探し出した。でも、ヒビ割れた廊下や窓や無人の部屋が無機質に存在するだけで、召使おるか、大臣達の姿すら見当たらない

何で誰も居ないんだ!?

一体みんな、どこに行ったんだ!?

リリアン又「レン!」

アレン「・・・リン!」

視界の向こうに、リンが映った。そしてリンは僕の方に近づいて、混乱する僕を落ち着かせる。

リンに会えたことで、僕は少し安堵した。でも内心、まだ混乱していた

アレン「リン。一体何が起きてるんだ？ いきなり爆発音が聞こえたと思ったら、今度はリン以外の周りの奴等が居なくなって・・・」

リリアン又「レン・・・大変なことが起きたの」

苦い顔をしたリンが、重々しく口を動かした

リリアンヌ「国民が『反乱連合軍』を結成させて、反乱を起こしたのよ」

レン「な・・・何だって!？」

城下町を一望できるバルコニー。

僕は、リンと二人でその上から確認した。その光景に、僕は驚愕した

立ち上がる黒煙は空を汚し、赤い炎は戦いの敗者を無慈悲に包み込む。

鎧を身に纏わず、剣・槍・鉄砲などを駆使し果敢に攻める反乱連合軍。対して分厚い鎧を身に纏い、兵力や戦闘経験のあるのにもかかわらず、国王軍の兵士達が次々と倒されていった

アレク「何で圧おされてるんだよ！ 国王軍はエリート集団なんだぞ！」

リリアンヌ「きっと長い戦のせいで疲れ果てているんだわ」
アレク「・・・そうだ！ こっちには国王護衛騎士団メイコが、団長メイコが居る！ 今すぐ呼び出して——」

リリアンヌ「それは無理よ」

アレン「——えっ？」

リリアンヌ「見て。反乱連合軍の先頭を」

リンの言う通り、僕は視線を全体から反乱連合軍の先頭部分に切り替えた。

その戦いの最前線に、二人の女が居た

一人は、赤い短髪に怒りの炎と同じ赤色の鎧を身に纏い、臆することなく握り締めた剣で国王軍の兵士の体を切り刻んでいく女性。そしてもう一人は、赤に染まる戦いに似合わない、綺麗な緑髪でツインテール。顔は黒い仮面で隠していて、黒と緑のコントラストした鎧ともドレスとも言える服装をした少女

僕は、この二人を知っていた

アレン「メイコ・・・それに、何でミクリアまで？」

リリアンヌ「メイコ護衛騎士団長は国を変えるため、ミクリア王女はカイト国王の敵を討つために・・・理由は違っけど、同じ目的のために共闘してるんだわ」

アレン「・・・リン、僕はどうなるの？」

震える声で、僕は問う。僕は怯えた目で、リンは苦悩する目で、互いの顔を見合う

リン「捕まって・・・処刑される」

アレン「!!」

リンの一言で、僕の世界が暗転した

殺される・・・僕が？

この国の王子である、アレン・アントーニア（この僕）が？

メイコ「数々の人を殺してきた断頭台！ 今度は貴様が、その上に立つと思えっ！」

アレン「！」

不意に頭の中に響き渡った、メイコのあの言葉。 あれは、この反^た乱の暗示だったというのか

気づいたときには、体中の震えが止まらなくなっていた。

僕は・・・死ぬの？

・・・嫌だ、そんなの嫌だ！

アレン「嫌だ・・・嫌だ嫌だ嫌だあっ！！」

僕はリンに、助けを求めるように縋りよった。 リンの足元に崩れ落ち、震える手でリンの服のスカートを掴んで、泣き叫んだ

アレン「死にたくないっ！ 死にたくないよお・・・！」
リリアン又「・・・」

もう何も考えられなかった。
ただ、『死にたくない』。 その一心だった

リリアンヌ「……………レン、」

リンが突然、僕の手を掴んだ。不意に感じたその温もりに、僕は顔を上げ、リンを見た

リリアンヌ「ついてきて」

アレ「えっ？ リン……？」

リリアンヌ「いいから早く！」

リンは僕の手を引っ張って、城の中に足を進め出す。何も考えられない僕は、今はただ、リンにその身を委ねることしか出来なかった

二話 僕とリン

リリアン又「早く入って」

引っ張られるまま連れてこられたのは、いくつもある召使達の部屋の、そのうちの一部屋だった。部屋の片側に二段ベットが二つ。もう片側にクローゼットが四つ。真ん中に四角いテーブルが一つと、イスが四つ。召使い達の部屋は、最低限の家具だけしかない。リンもこの部屋で寝起きしていた。リンは一番右の、自分のクローゼットをおもむろに開ける。そしてその中から、予備の召使の服を取り出した

リリアン又「私の服を貸してあげる。これを着てすぐ逃げるのよ」
アレン「えっ!？」僕は一瞬、気が引いた。口元が引きつる。
リンが渡してきたのは、他でもない、いつも女の召使達が着ていた『メイド服』だ。つまりリンは、僕に『女装しろ』と言っているのだ

リリアン又「『えっ!?' じゃないの! 死にたくないんでしょ!？」

アレン「あっ・・・うん・・・分かったよ」

リンの怒った顔が怖い。それに怖じ気づいた僕は、渋々了承した。リンは自分の髪を束ねていた黄色のリボンを解いて、僕に手渡した

リリアン又「レン、髪留めの紐を渡して」

アレン「待つて! リン、君はどうするんだよ?」

リリアン又「私は、レンの服を処分してから行くわ」

アレン「それって『後から』って意味だよな? それじゃ駄目だっ

！　一緒に逃げよう！」

リリアンヌ「……………」

リンはしばらく黙った。　やがて、ポツリと言ってきた

リリアンヌ「……………分かったわ。　——レン、」

ギュッ

アレン「！？」

リンが、いきなり僕を抱きしめた。
突然のことに、僕は戸惑った

アレン「リ、リン……………」

リリアンヌ「レン、」

ドーンッ……！

リリアンヌ「——」

アレン「・・・えっ？」

今、何て言ったの？

アレン「これで・・・いいんだよね？」

僕は鏡に映る自分の姿に、複雑に感じていた

リンがいつも着ていた服。　リンがいつも付けていたリボン。
鏡に映る今の僕は、まるでリンだ

うーん・・・何か複雑だなあ・・・

アレン「・・・」

それにしても・・・リンはあの時、何て言ってたんだ？

爆発音と重なって、全然聞こえなかった。

聞こうにも今リンは、僕の服を処分しに行ってて居ないしなあ・・・

リリアンヌ「いい？　　レン、私が迎えに行くまで出ちゃ駄目よ」

リンの言いつけで、僕はこの部屋でリンが迎えに来るのを待っていた………

アレン「……遅い」

いつまで掛かってるんだ？ たかが一着の服の処分には、そんなに掛からないはずなのに……

……まさかつ！ リンまで僕を――

そこまで考えて、僕は首を振って頭の中の考えを否定した

いや……リンに限って、そんなことするはずがない

だってリンは、僕にとって大切な――

アレン「……よしっ」

探しに行こう。

もし反乱連合軍に見つかったとしても、今の僕の姿を見て、誰も王子だとは思わないだろう

僕はゆっくりと扉を開ける。誰も居ないことを確認して、部屋から出た。

弾いた音が・・・銃撃の音が近くまで聞こえてくる

アレン「リン！ リーン！」

リンを捜して走り回る。 スカートのせいか、いつもと違って走りづらい

アレン「！」

目の前に大扉・・・いつの間にか、謁見の間の前まで来てしまった

・・・何だろう、この胸騒ぎ。
開けてはいけないようで・・・でも、開けなくちゃいけない・・・
そんな感じがする

気がつけば、右手が勝手に大扉の取っ手を握っていた。 そして、
体が勝手に大扉を押し開けていた

そこで、僕が見たのは――

「やっと来たな、・・・・・・・・『リリアンヌ』」

えっ――？

玉座にふんぞり返って座っている、『アレン・アンターニア王子』
だった

.

三話 アレンとリリアンヌ

アレン「リリアンヌ、早くこっちに来い」

足が、気づけばアレンの方に向かって動いていた。
何で、アレン・アントーニア王子がここに・・・

・・・ちよつと待て。

アレン・アントーニアは、この僕だ

じゃあ、目の前に座っている『アレン・アントーニア』は誰だ？

『顔のよく似た召使』

まさか——！？

「そんな・・・」

こんなことって・・・

アレン「リリアンヌ。これから最後の命令を——」

こんなこと――

「そんなの駄目だ！ 君が『身代わり』になるなんて！ 一緒に逃げようって――」

アレン「口を慎めリリアンヌ！ 俺に向かってその態度は何だっ！」――！」

・怖い。 その一言だ

アレンは、いつもみたく不適な笑みを浮かべた。

そして立ち上がり、玉座の左側を押した。 徐々に右に動く玉座。 その玉座の元あった場所に、大人一人分の長方形の穴が現れた

いつか・・・父さんから教えてもらった、『隠し通路』だ

アレン「この隠し通路を真っ直ぐ通れ。 しばらくしたら城の外に出られる。 そして、そこにイノベータを繋げているから、そいつに乗って逃げる。 その後は・・・もう二度と、絶対にイエロ・アントーニア（ここ）には戻ってくるな」

「・・・・・・」

アレン「さあ行け・・・行くんだっ！」

・僕は、リンを見捨てなければいけないのか？
リンは何も悪いこと、してないのに・・・

リリアンヌ「レン！」

「——！」

その時だった。

遠い記憶が、蘇ったのは——

アレ「なにー？」

リリアン「私、レンのおねーちゃんだから・・・レンが何か困ったら、私が助けてあげる！」

今まで仲良くしてくれたリンが、突然変なことを言ってきた

リリアン「だからレンもさ、私の言うこと、ちゃんと聞いてね」
アレ「？・・・うんっ！」

その時の僕は、まだこの言葉の意味を理解できなかった

その翌日だった。リンと離れ離れになったのは——

その言葉の意味を、今、理解できた

僕は――

リリアンヌ「――・・・かしこまりました」

――私は、アレンの指示通り隠し通路の中に入り込む。私が完全に入り込んだのを確認したアレンは、すぐさま玉座を押し戻した。光が閉ざされ、私は真っ暗な通路を、ひたすら真っ直ぐに歩き始めた

アレン「この、無礼者っ！」

リリアンヌ「・・・！」

遙か暗闇の後ろから、アレンの声が聞こえた

・・・いけない。戻っちゃ駄目だ

私は唇を噛み締め、再び歩き始める

リリアンヌ「っ！」

しばらくして、光が姿を現した。・・・出口だ。
周りを確認する。後ろは城壁。周りは荒廃した城下町。そして、傍らにイノベータが繋がれていた。後は何もない。誰も居ない

私は、イノベータに^{またが}跨った

リリアンヌ「イノベータ、行って」

私は右足で、イノベータに出るよう指示する。だが、イノベータは動かなかった。

アレן以外を乗せたことがないせいか、言うことを聞いてくれない
リリアンヌ「お願いイノベータ！ 走って！」

業を煮やした私は、右足で強く蹴った。
その瞬間、イノベータは感覚を取り戻したかのように走り出した

リリアンヌ「イノベータ。 どうっ、どうっ」

・もうここは、イエロ・アントーニアの外。
頃合いを見て、私は手綱を引き、イノベータを止まらせる。イノベータは「ブルル・・・」と、いつもみたいに唸った。

イノベータから降りて、私は——僕は、崩れ落ちた

「こんなの・・・」

溢れてくる涙

「こんなの・・・」

リンを置いてきた後悔

「こんなの・・・」

走馬燈のごとく駆け巡る、リンとの思いで——

アレン「こんなのないよ——！　リン——！」

僕は知ることになる。

あるとき僕に言ってくれた、リンの言葉

リリアンヌ「レンが何か困ったら、私が助けてあげる！」

その本当の意味を・・・

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5835q/>

悪ノ王子 ~アレンside~

2011年8月8日02時17分発行